２０２４年１１月０７日 読売東京 朝刊 都民２ １３Ｓ版 ２２頁

草花から語る文学論

文人の武蔵野

金子光晴 ④

金子光晴は、1958年9月16日に「武蔵野」という小文を発表しています。原稿用紙にして3枚ほどの1200字に満たない分量ですが、武蔵野の自然のことからそれを描く小説家、詩人、歌人、俳人にも話題が及ぶ文学論になっています。

金子の「武蔵野」は、「姫萩」という秋の草花の「風情」から語りはじめられます。そして、武蔵野に住んでいると、春から夏、夏から秋の自然の移り変わりが心に迫りやすく、とりわけ秋は多感になれるときだと言います。

紫苑、われもこう、すすき、桔梗といった秋の花を挙げつつ花の名前のことに話題を移し、歩いていても知らない植物がいっぱいあることを告白します。その上で、かつて日本の小説家は「名も知れぬ花が咲いて、名も知れぬ鳥が鳴いている林の中を、恋人と二人で散歩した」などと書きがちだったがそれは、小説家の自然知識への無関心の表れであると指摘します。

1966年の吉祥寺の駅前通り。吉祥寺で暮らした金子が蕭流し姿で歩いていたという（写真提供・らかんスタジオ鈴木育男）

金子の筆はここから日本人の自然観へと及んでいきます。19世紀の西洋の小説家に比べて自然描写が不得意だということになるが、それは小説家と同様に植物の名前などには気に留めない読者との関係性の中で培われてきたことなのだろう。では、日本人は自然に対して愛情が薄く「不感症な民族」なのかと言うとそれは早計である。自然現象を短い詩型の中に細やかに凝縮して表現してきた俳句や歌があるではないか、という主張です。その点で詩人は観念的である、ともしています。

言われてみると現代の私たちも、自然を愛好すると言っても草花の名には詳しくないのかもしれません。他方で、歳時記を片手に俳句を詠む人たちは、知らない人たちよりも愛情深いと言えそうです。

「武蔵野」は、歌よみがうらやましくなるのは「他人の釣った魚は大きいというたぐいかもしれない」と付け加えて閉じられています。本質を突きながら屈折した表現を重ねるまことに金子らしい文章だと言えるでしょう。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

＊

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。